田村根っこの話

昔々、田村の里（田根森）は朝からひどい吹雪であった。一人のみすぼらしい坊さんが雪の中を歩いて一軒の家へたどりついた。その家ではちょうど大きな鍋に芋を煮ていたが、主人は坊さんに

「この芋は石芋だからなかなか煮えない。別の家へ行ってみれば良い。」

と言って断った。

坊さんは隣の小さな家に行った。女が出て来て坊さんを囲炉裏の側へ迎えて飯を振る舞った。そのうち囲炉裏の火が細くなって、寒さが押し寄せてきた。女は、

「焚物があまりなくてすみません。このあたりは山がないものだから焚物が取れないのです。」

と言った。坊さんは寒い中で夜明しをした。出立する時に坊さんは春になったら、裏の荒地を掘ってみるように伝えた。

春になって女が荒地を掘ってみると、黒土ばかりで何もなかったが、焚火の火が黒土に燃えうつったので、燃える土（根っこ）であることが分かった。

それから村人たちはこの燃える土を「田村根っこ」と呼んで燃料としたのである。

吹雪の日にやって来た坊さんは弘法大師様であったと言い伝えされており、大師様をお帰しした家ではそれから芋を煮ると石のように固くて食えなくなるのだと言っている。